京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2022-10

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　二〇二二－一〇　嵯峨遺跡

嵯　峨　遺　跡

2023年

公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

嵯　峨　遺　跡

2023年

公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

序　　文

京都市内には、いにしえの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、住宅建設に伴う嵯峨遺跡の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

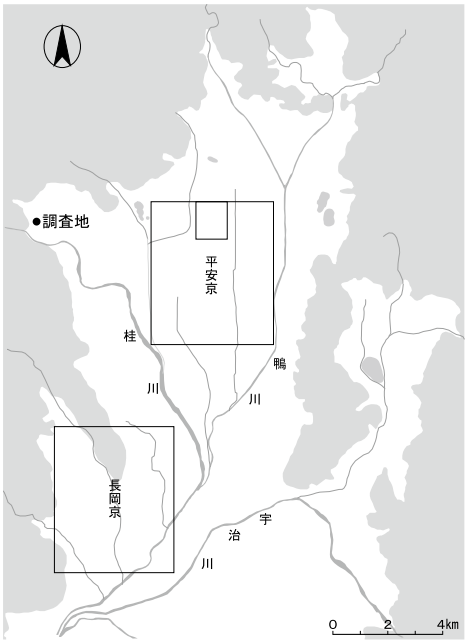
令和５年４月

公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

所　長　　井　上　満　郎

例　　言

1	遺　跡　名	嵯峨遺跡　（京都市番号　22 S 126）
2	調査所在地	京都市右京区嵯峨釈迦堂門前裏柳町26-2、26-4、26-5、26-6番地
3	委　託　者	株式会社エルハウジング　代表取締役　村井孝彦
4	調 査 期 間	2022年10月17日～2022年11月７日
5	調 査 面 積	135.3㎡
6	調査担当者	小檜山一良
7	使 用 地 図	京都市発行の都市計画基本図（縮尺１：2,500）「小倉山」・「大覚寺」を参考にし、作成した。
8	使用測地系	世界測地系　平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した）
9	使 用 標 高	T.P.：東京湾平均海面高度
10	使用土色名	農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版　標準土色帖』に準じた。
11	遺 構 番 号	通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
12	遺 物 番 号	種類ごとに通し番号を付し、写真番号も同一とした。土器類は番号のみとし、瓦類は「瓦」を前に付けた。
13	本 書 作 成	小檜山一良・中谷正和
14	備　　考	上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、調査業務職員及び資料業務職員があたった。
15	協　力　者	宗教法人 天龍寺



（調査地点図）

目　　次

１．調査経過 …… 1
（１）調査に至る経緯 …… 1
（２）調査の経過 …… 2
２．遺　　跡 …… 4
（１）立地と歴史的環境 …… 4
（２）周辺の調査 …… 7
３．遺　　構 …… 10
（１）基本層序 …… 10
（２）鎌倉時代初期以前の遺構 …… 11
（３）鎌倉時代の遺構 …… 11
（４）室町時代の遺構 …… 12
４．遺　　物 …… 13
（１）遺物の概要 …… 13
（２）土器類 …… 13
（３）瓦類 …… 16
５．ま と め …… 17

図　版　目　次

図版１　遺構　遺構平面図（１：150）
図版２　遺構　調査区西壁断面図（１：100）
図版３　遺構　調査区東壁・南壁断面図（１：100）
図版４　遺構　１　調査区全景（北西から）
２　調査区南東部（西から）
図版５　遺構　１　柱列23（東から）
２　柱列23柱穴７土器出土状況（東から）
３　杭列42（南から）
４　流路27瓦出土状況（北から）
５　拡張区２全景（北西から）
図版６　遺物　出土土器類・瓦類

挿　図　目　次

図１　調査位置図（１：5,000）　……　1
図２　調査区配置図（１：400）　……　2
図３　調査前全景（北西から）　……　3
図４　重機掘削状況（南から）　……　3
図５　調査状況１（南から）　……　3
図６　調査状況２（北西から）　……　3
図７　周辺地形分類図及び遺跡分布図（１：20,000）　……　5
図８　周辺調査位置図（１：5,000）　……　7
図９　基本層序柱状図（１：40）　……　10
図10　柱列23柱穴７土器出土状況図（１：20）　……　11
図11　柱列23実測図（１：50）　……　11
図12　柱列13実測図（１：50）　……　12
図13　出土土器類実測図（１：４）　……　14
図14　出土瓦類拓影及び実測図（１：４）　……　16
図15　『山城国嵯峨諸寺応永鈞命絵図』　……　19

表　目　次

表１　周辺遺跡一覧表　……　4
表２　周辺調査一覧表　……　8
表３　遺構概要表　……　10
表４　遺物概要表　……　13
表５　出土土器類一覧表　……　15

嵯　峨　遺　跡

１．調査経過

（１）調査に至る経緯（図１）

調査地は、京都市右京区嵯峨釈迦堂門前裏柳町26-2番地他に所在しており、嵯峨遺跡の北西部に位置する（図１）。嵯峨遺跡は、鎌倉時代の建長年間（1249～1256）に後嵯峨上皇により院の御所である亀山殿が築かれて以降、天龍寺・臨川寺・鹿王院などの禅宗系寺院の成立に伴い、室町時代に著しく発展した寺院街である。

当該地に住宅建設が計画されたことから、2022年度に京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下、「文化財保護課」という）が試掘調査を実施し、平安時代後期及び中世の遺物包含層を確認した。これにより、文化財保護課から原因者に対し発掘調査の指導が行われ、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所が委託を受けて発掘調査を実施することとなった。

調査の目的は、嵯峨遺跡の遺構の確認と当地の歴史的変遷を明らかにすることである。

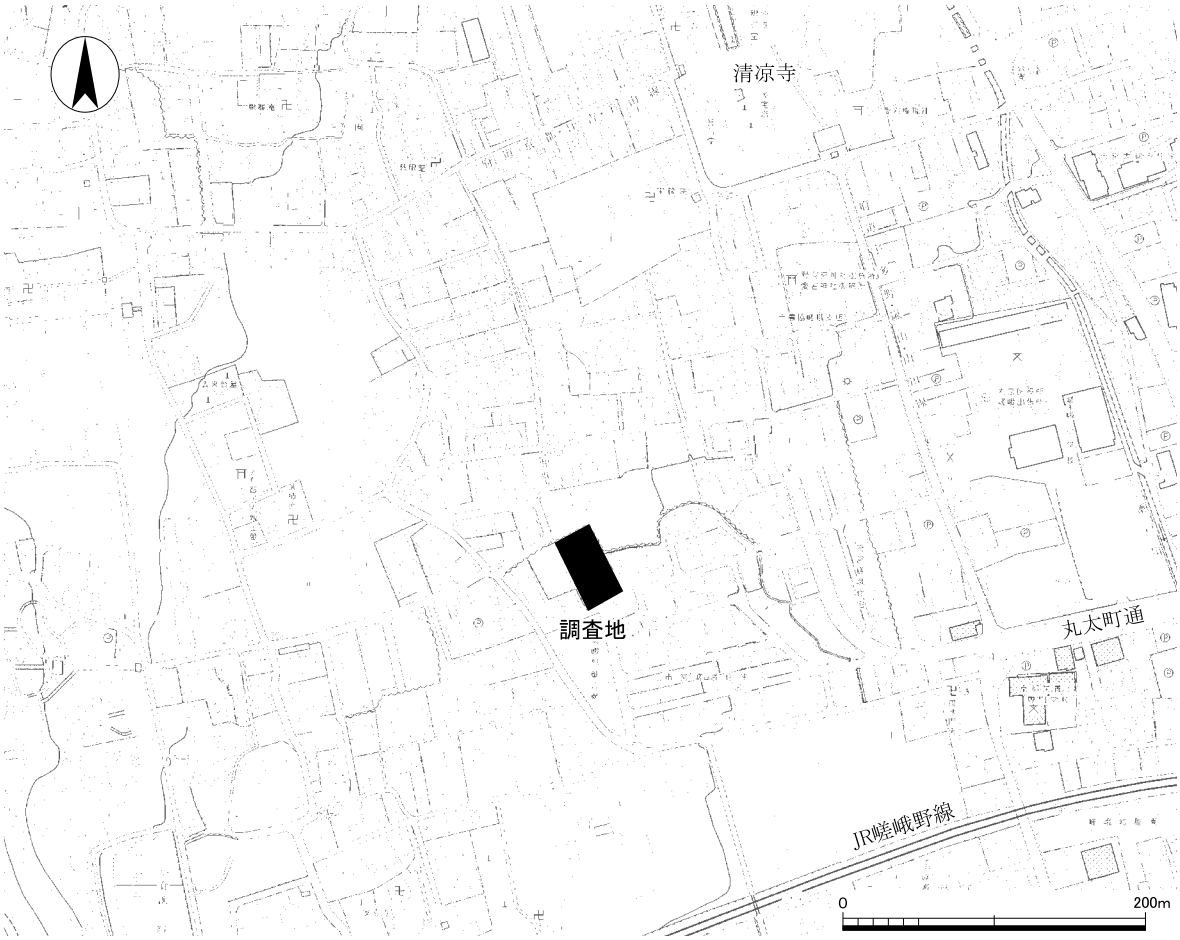


図１　調査位置図（１：5,000）

（２）調査の経過（図２～６）

調査区は、文化財保護課の指導の下、敷地中央部に22ｍ×６ｍの区画を設定した。のちに建物柱筋確認のため文化財保護課と原因者との協議をうけて、新たに３箇所計3.3㎡を拡張し、調査面積は135.3㎡となった。

2022年10月17日から調査区の重機掘削を開始した。調査では地山面で鎌倉時代初期以前の流路、鎌倉時代の柱列・柱穴・落込み、室町時代の柱列・柱穴・井戸・土坑・溝・杭列などを検出した。１面３時期の調査となった。調査中の排土は、敷地内の東側部分に仮置きした。調査後の埋戻しは不要であった。遺構の記録は、随時実測図を作成し、適宜写真撮影を行った。11月７日にすべての調査を終了し、撤収した。

調査中は、適時文化財保護課の検査・指導を受け、10月28日には鈴木久男検証委員（元京都産業大学教授）による検証を受けた。

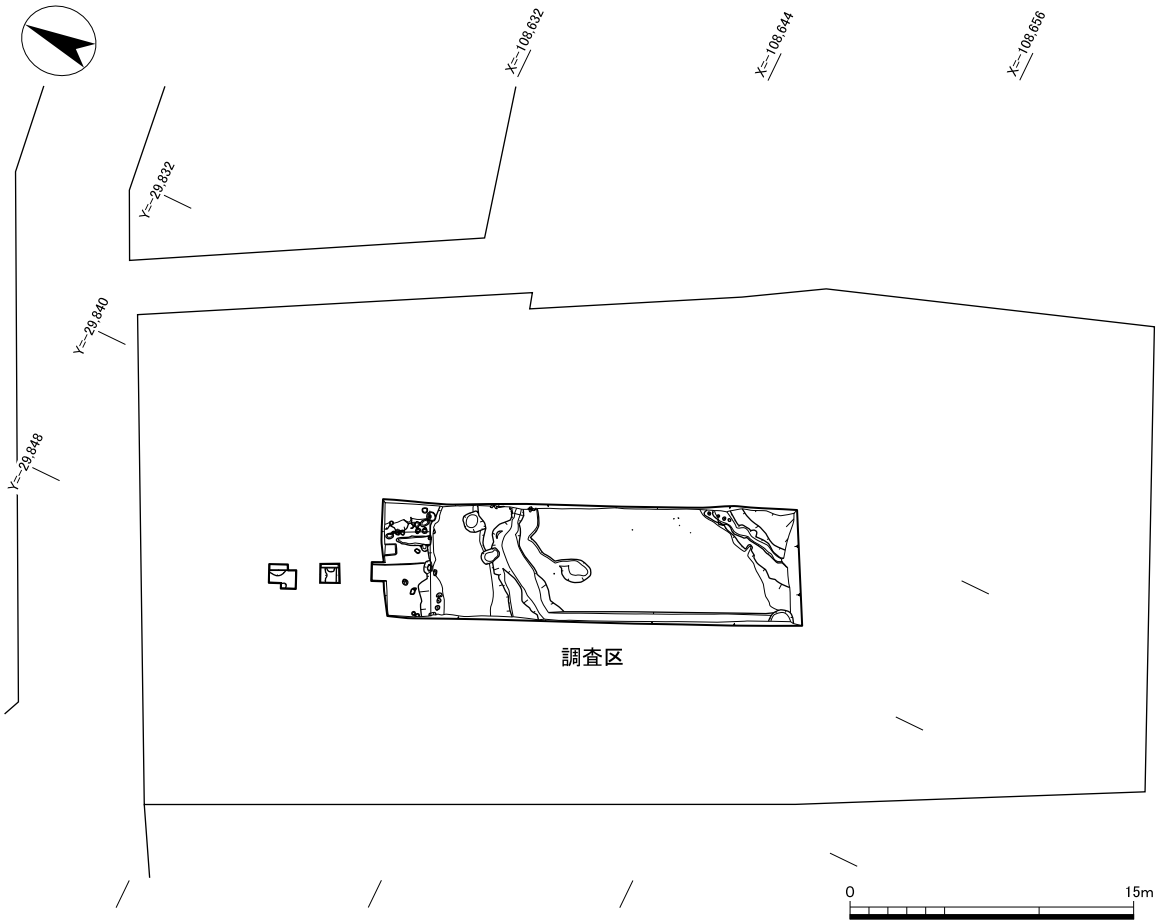


図２　調査区配置図（１：400）

図３　調査前全景（北西から）

図４　重機掘削状況（南から）

図５　調査状況１（南から）

図６　調査状況２（北西から）

２．遺　　跡

（１）立地と歴史的環境（図７、表１）

調査地は京都盆地の北西部、北は愛宕山麓、西は小倉山、南は桂川（大堰川）、東は有栖川にされた、いわゆる嵯峨と呼ばれる地域に位置する。古代の行政区分では山城国葛野郡にあたる。

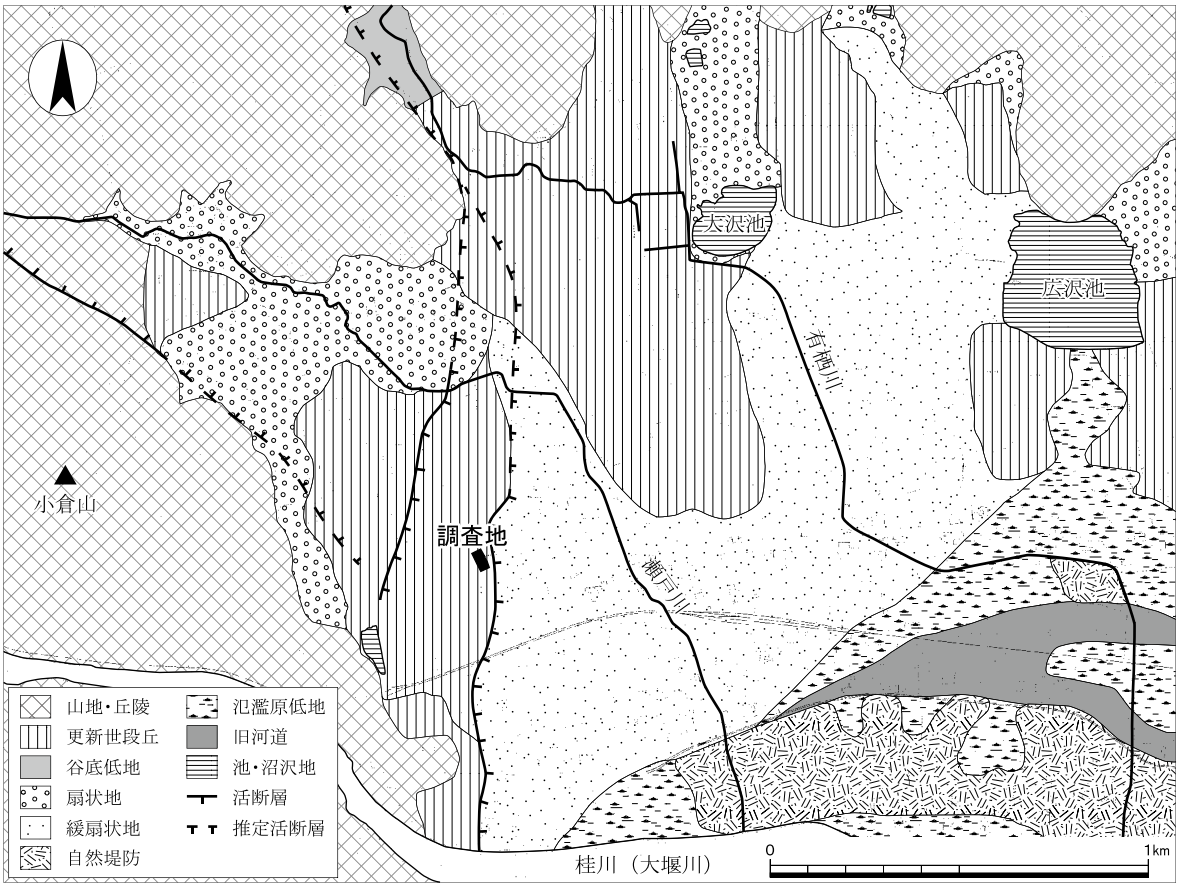
周囲の地理的環境を概観すると、嵯峨北方に広がる愛宕山麓や小倉山などは丹波山地の末端部にあたり、丹波層群と呼ばれる中古生代に堆積した泥岩・砂岩・チャートなどが固結した基盤岩類によって構成される。当該山麓の南には更新世段丘や扇状地、および緩扇状地が広がり、さらにその南側の桂川（大堰川）左岸域には自然堤防や氾濫原低地が形成されている（図７上段）。

調査地は、小倉山東麓の更新世段丘の東縁部に立地している[1)]。

嵯峨ではこれまでに旧石器時代から近世までの遺跡が確認されている。調査地周辺の歴史的環境について、『京都市遺跡地図』を基に概観する（図７下段）。括弧内の数字は図の遺跡番号と一致する。

表１　周辺遺跡一覧表

番号	名　称	種　類	時　代	所　在　地
A801	天龍寺庭園	史跡・特別名勝	室町	嵯峨天竜寺芒ノ馬場町
A804	大覚寺御所跡	史跡	平安	嵯峨大沢町ほか
A809	嵐山	史跡・名勝	-	嵯峨［西京区］嵐山
A810	大沢池附名古曾滝跡	名勝	平安前期	嵯峨大沢町ほか
C823	遍照寺旧境内建物跡	史跡(指定)	平安	北嵯峨朝原山町
C826	鹿王院庭園	名勝(指定)	-	嵯峨北堀町
839	鳥居本古墳群	古墳	古墳後期	嵯峨鳥居本一華表町ほか
840	観空寺谷古墳群	古墳	古墳後期	北嵯峨朝原山町
841	朝原山古墳群	古墳	古墳後期	北嵯峨朝原山町
842	嵯峨七ツ塚	古墳	古墳後期	北嵯峨赤坂町
843	長刀坂古墳群	古墳	古墳後期	北嵯峨朝原山町ほか
844	遍照寺山古墳群	古墳	古墳後期	北嵯峨長刀坂町ほか
845	山越古墳群	古墳	古墳後期	鳴滝音戸山町ほか
849	大覚寺古墳群	古墳	古墳後期	嵯峨大覚寺門前登り町ほか
850	一本木古墳	古墳	古墳後期	嵯峨広沢西裏町
851	稲荷古墳	古墳	古墳後期	嵯峨広沢西裏町
852	広沢古墳群	古墳	古墳後期	嵯峨広沢池下町
855	甲塚古墳	古墳	古墳後期	嵯峨甲塚町
858	嵯峨院跡	離宮跡	平安	北嵯峨山王町ほか
859	観空寺跡	寺院跡	平安	嵯峨観空寺岡崎町
860	清凉寺境内	寺院跡	平安	嵯峨釈迦堂藤ノ木町
861	檀林寺跡	寺院跡	平安	嵯峨天龍寺立石町
862	北嵯峨洞ノ内町遺跡	散布地	平安前期	北嵯峨洞ノ内町
863	広沢池遺跡	散布地	旧石器	嵯峨広沢町ほか
864	遍照寺跡	寺院跡	平安	嵯峨広沢町ほか
865	広沢西裏遺跡	散布地	縄文	嵯峨釣殿町ほか
902	嵯峨折戸町遺跡	集落跡	飛鳥～平安	嵯峨折戸町ほか
903	嵯峨北堀町遺跡	集落跡	飛鳥～平安	嵯峨北堀町ほか
904	阿刀神社境内	神社	不詳	嵯峨広沢南野町
905	宝幢寺境内	寺院跡	室町	嵯峨北堀町
906	臨川寺跡	寺院跡	室町	嵯峨天龍寺造路町
937	嵯峨遺跡	寺院跡	鎌倉～室町	嵯峨釈迦堂門前裏柳町ほか
A953	嵐山	史跡・名勝	-	嵐山



国土交通省発行1：50,000 土地分類基本調査図「京都」、国土地理院発行1：25,000 都市圏活断層図「京都西北部」から作成。

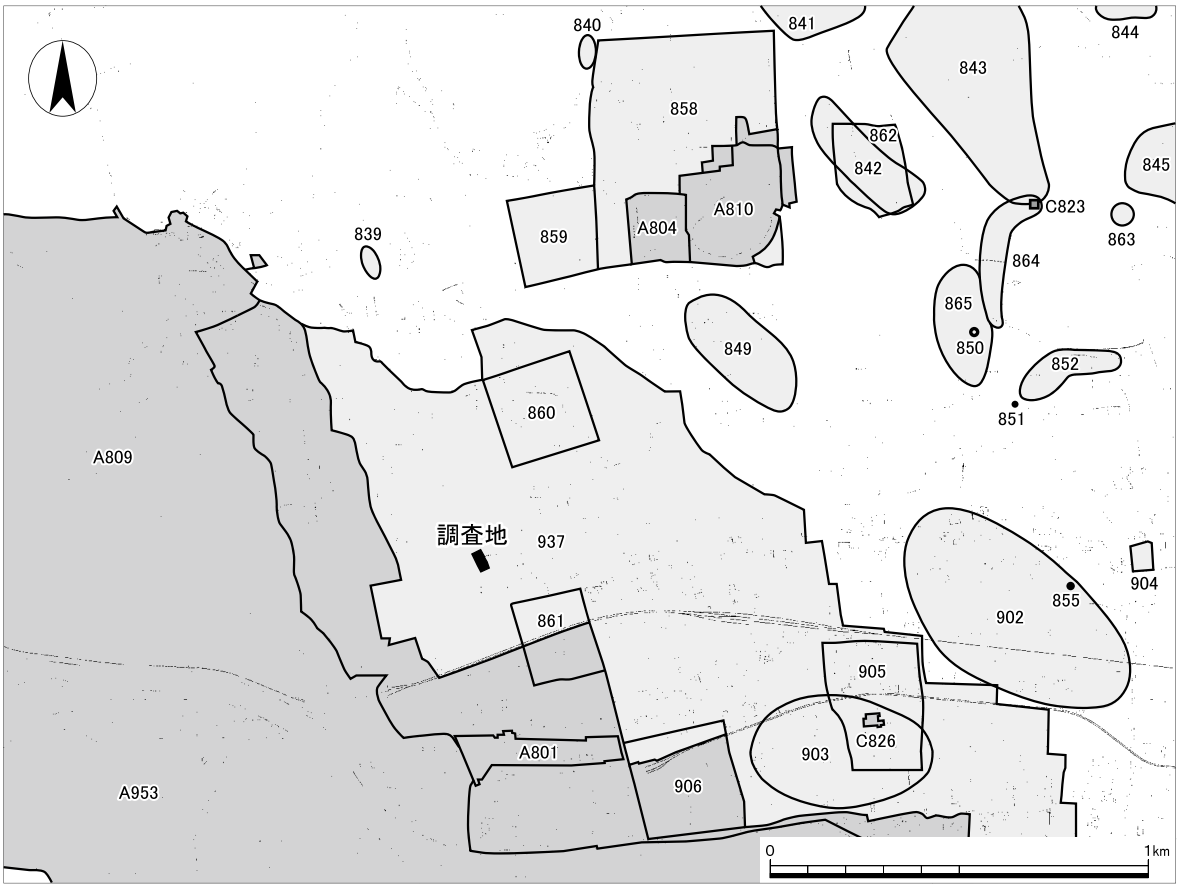


図７　周辺地形分類図及び遺跡分布図（１：20,000）

旧石器時代から弥生時代の様相は明らかではないが、広沢池北東部に位置する広沢池遺跡（863）では旧石器時代、広沢池南西部に位置する広沢西裏遺跡（865）では縄文時代の遺物が採取されている。

古墳時代から奈良時代の遺跡は、古墳や集落跡などが確認されている。古墳は、古墳時代後期に多数の古墳が築造される。横穴式石室を埋葬主体とする円墳が主体であり、北方の丘陵部と、丘陵南側の更新世段丘・扇状地に分布する。丘陵部には、鳥居本古墳群（839）、観空寺谷古墳群（840）、朝原山古墳群（841）、長刀坂古墳群（843）、遍照寺山古墳群（844）がある。更新世段丘・扇状地には大覚寺古墳群（849）、嵯峨七ツ塚（842）、山越古墳群（845）、一本木古墳（850）、稲荷古墳（851）、広沢古墳群（852）、甲塚古墳（855）などが分布する。中でも甲塚古墳は全長14.4ｍの横穴式石室を備える径38ｍの円墳で、この地域の首長墓の系譜をひく古墳と推定されている。

また、桂川（大堰川）左岸域の自然堤防や氾濫原低地に位置する嵯峨遺跡（937）や嵯峨折戸町遺跡（902）、嵯峨北堀町遺跡（903）などでは、飛鳥・奈良時代の竪穴建物や遺物包含層が確認されており、集落の存在が推定されている。

平安時代の遺跡には、嵯峨天皇により建立された嵯峨院跡（858・A810・のちに大覚寺（A804））、観空寺跡（859）、源融により創建された棲霞寺（のちに清凉寺（860））、花山天皇の勅願による遍照寺（C823・864）、嵯峨天皇皇后橘嘉智子により創建された檀林寺跡（861）がある。なお、北嵯峨洞ノ内町遺跡（862）では試掘調査や立会調査によって前期の土器や瓦が出土しており、寺院が所在する可能性が指摘されている。また、小倉山や亀山の東麓一帯は史跡・名勝嵐山（A809・A953）に指定されている。

なお、平安時代前期の嵯峨の土地利用状況を伝える『山城国葛野郡班田図』は、36丈の正方形を１里として、桂川の北側に６里、南側に３里の計９里を記す。これら９里は京郊条里の一条と二条に属し、北側６里のみ北に対して約16度西に振る。嵯峨の条里地割が他と比べて大きく傾く要因としては、当地の地形が西傾であったためと推定されている[2)]。

鎌倉時代以降になると周辺の景観は一変する。建長年間に後嵯峨上皇により院の御所である亀山殿が築かれて以降、足利尊氏による天龍寺（A801）、後醍醐天皇による臨川寺（906）、足利義満による宝幢寺（905）などの禅宗系寺院の成立に伴い、室町時代には天龍寺の塔頭寺院街が著しく発達した。15世紀前半頃の天龍寺周辺の様子を描いた『山城国嵯峨諸寺応永鈞命絵図』によれば、臨川寺および天龍寺に関わる塔頭や在家は、150以上を数え、周辺には門前町が形成されていることがわかる。

（２）周辺の調査（図８、表２）

嵯峨遺跡は、平成19年度に京都市により周知の埋蔵文化財包蔵地に加えられた遺跡である。遺跡の範囲は、東は右京区嵯峨朝日町の車折神社周辺、南は天龍寺・臨川寺の嵯峨天龍寺芒ノ馬場町・天龍寺造路町周辺、西は落柿舎の嵯峨小倉山緋明神町周辺、北は五山送り火鳥居形南方の鳥居本仏餉田町周辺までの東西約２km、南北約1.5kmの広い範囲である。この地域では、嵯峨遺跡が新たに追加されるまでは、史跡・名勝嵐山、史跡・特別名勝天龍寺庭園、清涼寺跡、檀林寺跡などの史跡や遺跡が分布し、調査が実施されていた。今回は、調査地を中心とした嵯峨遺跡北西部の既往調査を概観する。これまでの調査地周辺の調査では、平安時代を中心として中世から近世の遺構が多く検出されている。図８の調査番号は、本文中の番号と一致する。

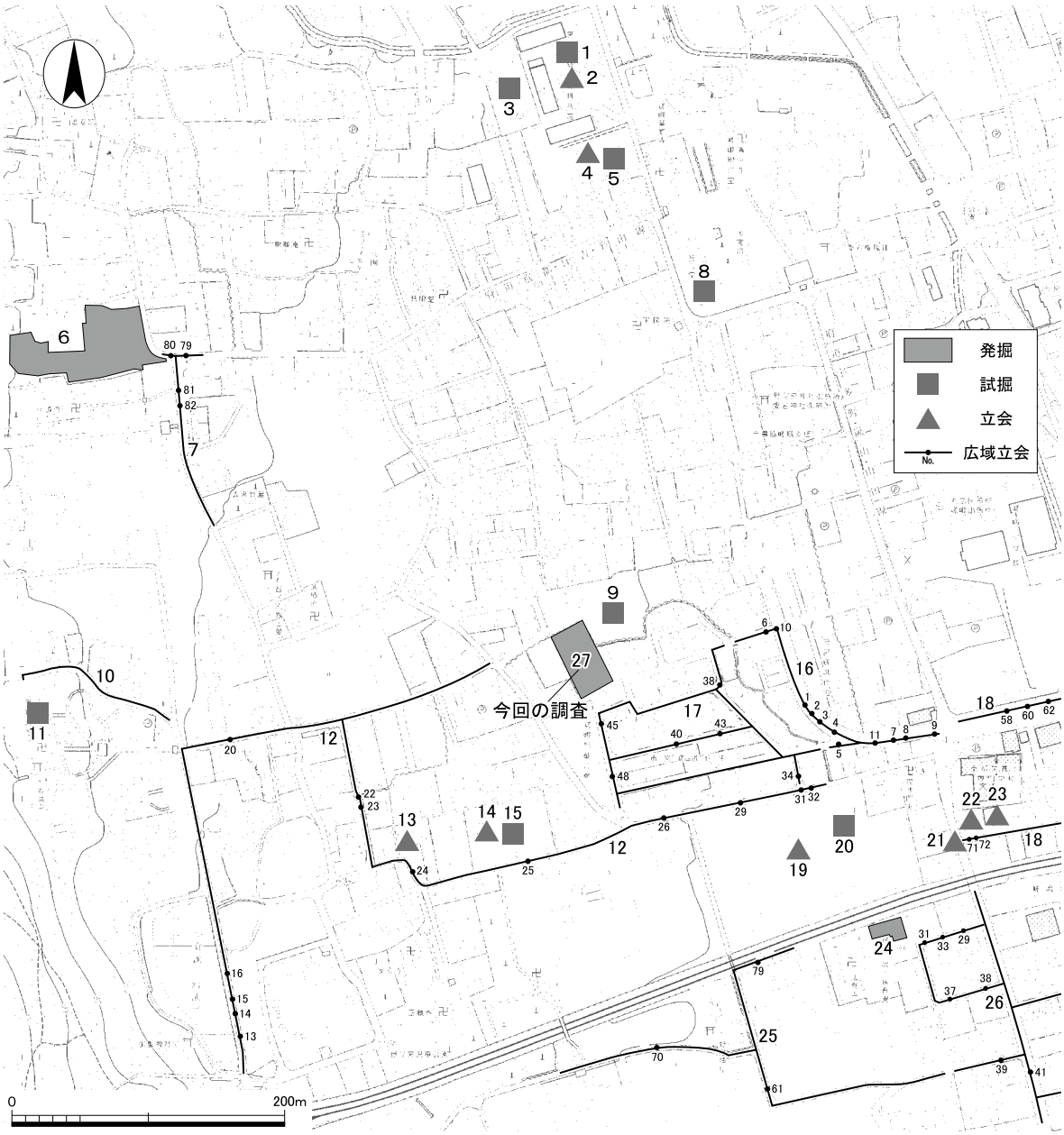


図８　周辺調査位置図（１：5,000）

表２　周辺調査一覧表

地点	遺跡名	調査方法	調査機関	調査年度	主な遺構	文献
1	嵯峨遺跡	試掘	市保護課	2017	中世遺物包含層もしくは造成土	『京都市内遺跡試掘調査報告　平成30年度』京都市文化市民局　2019年
2	嵯峨遺跡	立会	市保護課	2019	中世遺物包含層	『京都市内遺跡詳細分布調査報告　令和元年度』京都市文化市民局　2020年
3	嵯峨遺跡	試掘	市保護課	2008	室町の土坑・溝・ピット・谷状落込み	宇野隆志「Ⅴ-2 嵯峨遺跡　№70」『京都市内遺跡試掘調査報告　平成20年度』京都市文化市民局　2009年
4	嵯峨遺跡	立会	市保護課	2015	時期不明の土坑・落込み・遺物包含層	『京都市内遺跡詳細分布調査報告　平成27年度』京都市文化市民局　2016年
5	嵯峨遺跡	試掘	市保護課	2014	平安～中世の遺構	『京都市内遺跡試掘調査報告　平成26年度』京都市文化市民局　2015年
6	史跡・名勝嵐山	発掘	市埋文	2012	鎌倉～室町の路面・石列・溝・土坑、室町の雨落溝・土坑	東　洋一『史跡・名勝　嵐山』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2012-7　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2012年
7	史跡・名勝嵐山	広域立会	市埋文	1995	№81・82：室町の土坑、№79・80：江戸以前の路面	『京都嵯峨野の遺跡』
8	清涼寺境内	試掘	市保護課	2003	近世の整地層・井戸・土器集積遺構	『京都市内遺跡試掘調査報告　平成16年度』京都市文化市民局　2005年
9	嵯峨遺跡	試掘	市保護課	2011	礎石建物・池跡	鈴木久史「Ⅳ-1 嵯峨遺跡　№64」『京都市内遺跡試掘調査報告　平成23年度』京都市文化市民局　2012年
10	史跡・名勝嵐山	立会	市保護課	2012	近世以降の遺物包含層	『京都市内遺跡詳細分布調査報告　平成24年度』京都市文化市民局　2013年
11	史跡・名勝嵐山	試掘	市保護課	2014	江戸礎石据付け穴・土坑	『京都市内遺跡試掘調査報告　平成26年度』京都市文化市民局　2015年
12	史跡・名勝嵐山、嵯峨遺跡	広域立会	市埋文	1992	№22・31・32：平安後期の土坑、№20・23：平安後期の遺物包含層、№24・29：鎌倉の遺物包含層、№26：室町前期以前の東西溝、№13～16：室町前期の堤、№25：室町中期の遺物包含層	『京都嵯峨野の遺跡』
13	嵯峨遺跡	立会	市保護課	2019	時期不明の遺物包含層	『京都市内遺跡詳細分布調査報告　令和元年度』京都市文化市民局　2020年
14	嵯峨遺跡	立会	市保護課	2019	時期不明の遺物包含層	『京都市内遺跡詳細分布調査報告　令和元年度』京都市文化市民局　2020年
15	史跡・名勝嵐山	試掘	市保護課	2017	時期不明の遺物包含層	『京都市内遺跡試掘調査報告　平成29年度』京都市文化市民局　2018年
16	嵯峨遺跡	広域立会	市埋文	1992	№6：平安後期の遺物包含層、№10・11：鎌倉の遺物包含層、№2：室町前期の遺物包含層、№1・4・5・7：室町前期以降の路面、№3：室町中期の遺物包含層、№8：時期不明の柱穴、№9：時期不明の南北溝	『京都嵯峨野の遺跡』
17	嵯峨遺跡	広域立会	市埋文	1993	№38：平安前期の遺物包含層、№43：鎌倉以前の柱穴、№45：鎌倉～室町の土坑、№34：室町前期の井戸、№40：室町前期の南北溝、№48：室町前期の柱穴	『京都嵯峨野の遺跡』
18	嵯峨遺跡	広域立会	市埋文	1991	№62：平安前期の遺物包含層、№60：平安中～後期の南北溝、№58：平安の井戸、№71・72：室町前期の南北溝	『京都嵯峨野の遺跡』
19	嵯峨遺跡、檀林寺跡	立会	市保護課	2018	時期不明の遺物包含層	『京都市内遺跡詳細分布調査報告　平成30年度』京都市文化市民局　2019年
20	嵯峨遺跡、檀林寺跡	試掘	市保護課	2017	時期不明の土坑・溝	『京都市内遺跡試掘調査報告　平成29年度』京都市文化市民局　2018年
21	嵯峨遺跡	立会	市保護課	2009	中世～近世の落込み	『京都市内遺跡詳細分布調査報告　平成21年度』京都市文化市民局　2010年
22	嵯峨遺跡	立会	市保護課	2012	室町の土坑、時期不明の土坑・ピット・落込み	『京都市内遺跡詳細分布調査報告　平成24年度』京都市文化市民局　2013年
23	嵯峨遺跡	立会	市保護課	2018	時期不明の遺物包含層	『京都市内遺跡詳細分布調査報告　平成30年度』京都市文化市民局　2019年
24	史跡・名勝嵐山、檀林寺跡、嵯峨遺跡	発掘	市埋文	1977	江戸の土坑	『京都嵯峨野の遺跡』
25	史跡・名勝嵐山、檀林寺跡、嵯峨遺跡	広域立会	市埋文	1995	№61：平安前期の東西溝、№70：平安後期の南北溝、№79：鎌倉～室町の土坑	小檜山一良「史跡名勝嵐山」『平成7年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1997年
26	史跡・名勝嵐山、檀林寺跡、嵯峨遺跡	広域立会	市埋文	1991	№41：平安後期の東西溝、№29・38：室町中期の南北溝、№33・39：室町後期の南北溝、№31・37：江戸の南北溝	『京都嵯峨野の遺跡』
27	嵯峨遺跡	発掘	市埋文	2022	鎌倉初期以前の流路、鎌倉の柱列・落込み、室町の柱列・杭列・井戸・溝・土坑・造成土	本報告

※ 調査機関の「市埋文」は財団法人・公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所、「市保護課」は京都市文化財保護課。
※ 文献の『京都嵯峨野の遺跡』は、小檜山一良ほか『京都嵯峨野の遺跡－広域立会調査による遺跡調査報告－』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1997年。

平安時代　前期の遺構には東西溝（25)、遺物包含層（17・18）がある。中期から後期の遺構には南北溝（18）がある。後期の遺構には土坑（12)、南北溝（25)、東西溝（26)、遺物包含層（12・16）などがある。さらに井戸（18）が検出されている。

中世　鎌倉時代の遺構には柱穴（17)、遺物包含層（12・16）がある。鎌倉時代から室町時代の遺構には路面（６)、石列（６)、溝（６)、土坑（６・17・25)、遺物包含層（１・２）がある。室町時代前期の遺構には柱穴（17)、井戸（17)、南北溝（17・18)、東西溝（12)、路面（16)、堤（12)、遺物包含層（16）などがある。室町時代中期の遺構には南北溝（26)、遺物包含層（12・16）がある。室町時代後期の遺構には南北溝（26）がある。さらに室町時代の土坑（３・６・７・22)、溝（３)、ピット（３)、谷状落込み（３)、雨落ち溝（６）なども検出されており、この時代の遺構が最も多い。

近世　江戸時代の遺構には礎石据付け穴（11)、土坑（11)、南北溝（26）などがある。さらに整地層（８)、井戸（８)、土器集積遺構（８)、遺物包含層（10）などが検出されている。

周辺の調査成果からは、平安時代から中世・近世まで多くの遺構を検出しており、この地域の古代から続く土地利用の一端が明らかになっている。

註

１）　地形分類は、国土交通省国土政策局発行の５万分の１都道府県土地分類基本調査図（人口地形及び自然地形分類図）「京都」（平成26年３月発行）に基づく。
なお、調査地が立地する更新世段丘の東縁には、水尾・樫原断層に連なる北東から南西方向の活断層が存在すると指摘されている。
植村善博「変位地形と地下構造からみた京都盆地の活断層」『京都歴史災害研究』第２号　立命館大学COE推進機構立命館大学歴史都市防災研究センター京都歴史災害研究会　2004年

２）　金田章裕「郡・条里・交通路」『平安京提要』 角川書店　1994年
『山城国葛野郡班田図』は、天長５年（828）班田図の大要を伝えるものと考えられている。

参考文献

京都府編『地形分類図』京都西北部　1981年
『京都市遺跡地図』 京都市文化市民局　2020年
『山城国嵯峨諸寺応永鈞命絵図』天龍寺所蔵 『日本荘園絵図聚影　二　近畿一』 東京大学出版会　1992年
小檜山一良ほか『京都嵯峨野の遺跡－広域立会調査による遺跡調査報告－』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1997年
村尾政人・小林 郁也・齋藤 智子・辻 康男『嵯峨遺跡 埋蔵文化財発掘調査報告書』 国際文化財株式会社 2019年

３．遺　　構

（１）基本層序（図９）

調査区の現地表面の標高は、北側が約51.6ｍ、南側が約52.4ｍで、南端部付近が１段高くなっている。

北部の基本層序は、上から現代までの耕作土層が厚さ約0.1ｍ、中世整地層（造成土）が厚さ約0.1ｍ、その下が黄褐色粘土の地山となる。

中央部は、上から現代までの耕作土層が厚さ約0.1ｍ、中世整地層（造成土）が厚さ約0.9ｍ、その下が平安時代末から鎌倉時代初期の遺物を含む厚さ約0.1ｍの暗灰黄色粘土層、その下が灰色砂礫の流路堆積層となる。

南部は、上から現代までの耕作土層が厚さ約0.6ｍ、中世整地層（造成土）が厚さ約0.3ｍ、その下が黄褐色粘土の地山となる。

遺構はすべて地山面で検出した。

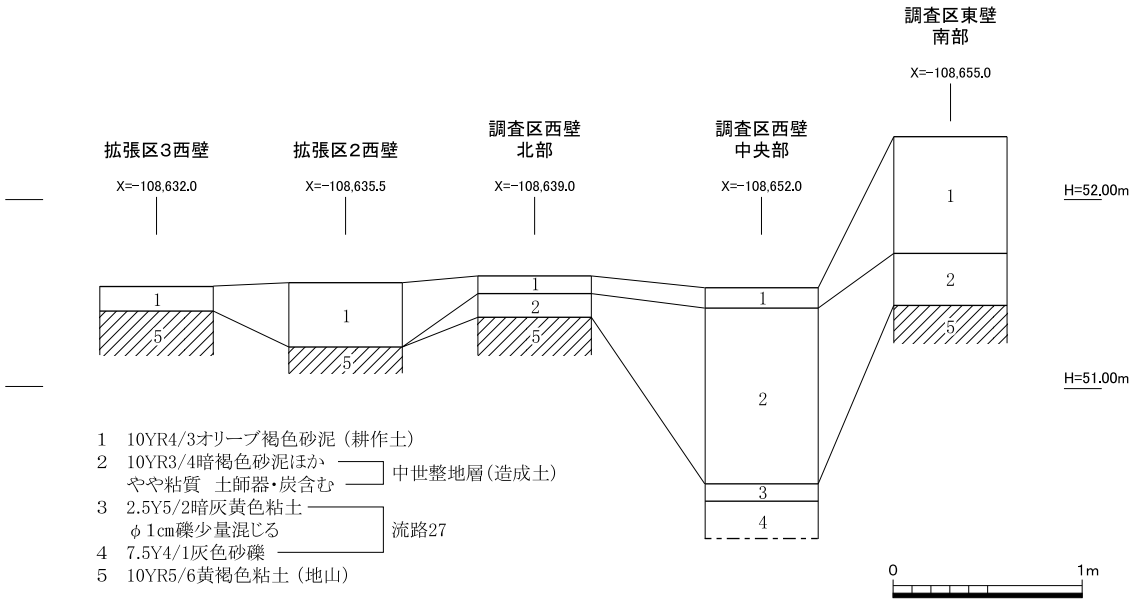


図９　基本層序柱状図（１：40）

表３　遺構概要表

時　　代	遺　　構	備　　考
鎌倉時代初期以前	流路27	
鎌倉時代	柱列23、落込み35	
室町時代	井戸２、溝10、柱列13、土坑34、杭列42	

（２）鎌倉時代初期以前の遺構（図版１・４）

鎌倉時代初期以前の遺構には、流路がある。

流路27（図版５）　調査区中央部で検出した自然流路である。北東から南西に15ｍ以上、幅約12ｍ、深さ0.3ｍ以上を測る。東側と西側は調査区外となる。完掘はしていない。主軸方位は北に対し東に振る。堆積土は上層が暗灰黄色粘土、下層が灰色砂礫を主体とする。上層に12世紀末から13世紀初頭の土器類を包含する。土師器・陶器・瓦類が出土した。

（３）鎌倉時代の遺構（図版１・４）

鎌倉時代の遺構には、柱列・落込みがある。

柱列23（図版５、図10・11）　調査区北部で検出した３基の柱穴（柱穴23・７・28）からなる。柱列の方位は、東に対し北へ約26.5度振る。柱穴は径0.5～0.6ｍ、深さ0.5～0.6ｍ。柱間は等間で約2.7ｍ（９尺）。柱穴７は、南半部を土坑34により削平されている。底部に根石を据える。柱の抜き取り後、13世紀後半の土師器皿を埋納する。

落込み35　調査区北部で検出した。東西1.2ｍ以上、南北2.5ｍ以上、深さ約0.2ｍ。底部は東側が低

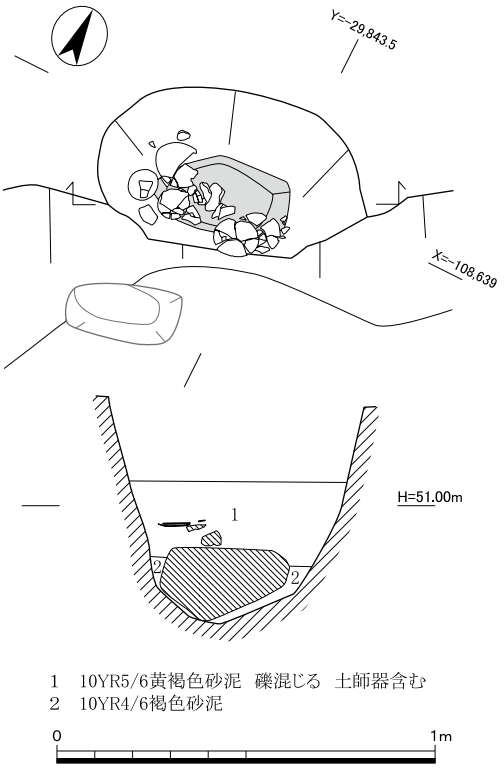


図10　柱列23柱穴７土器出土状況図（１：20）

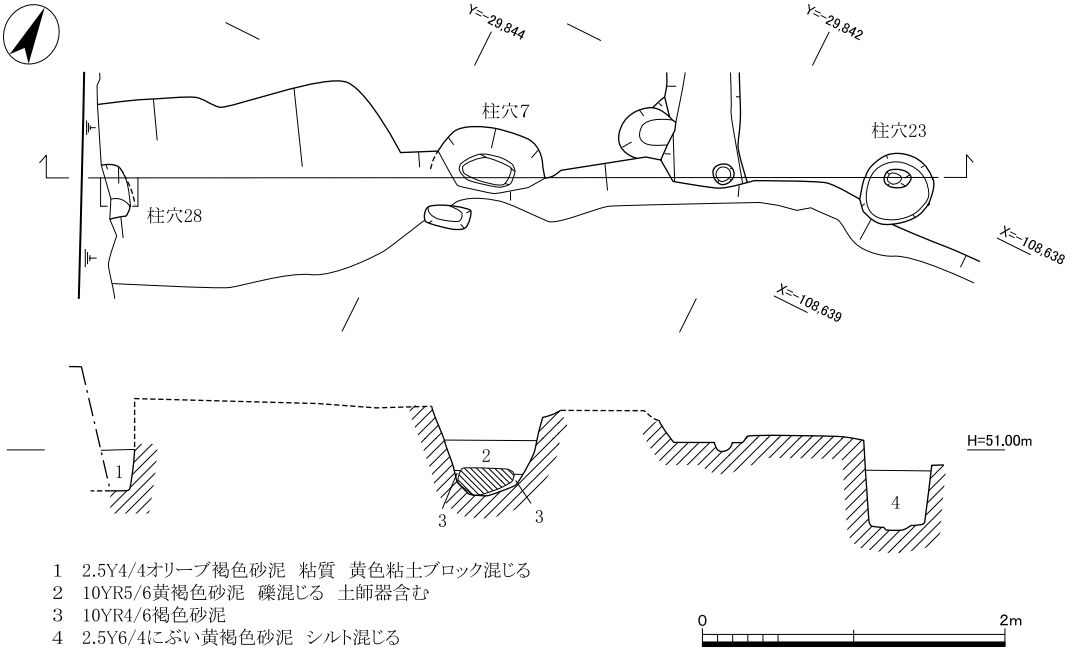


図11　柱列23実測図（１：50）

い傾きをもつ。底部には径0.1ｍ以下の礫が多くみられる。埋土はにぶい黄褐色砂泥を主体とする。南側は土坑34によって削平されている。北側と東側は調査区外となる。

（４）室町時代の遺構（図版１・４）

室町時代の遺構には、井戸・溝・柱列・土坑・杭列などがある。

井戸２　調査区南隅で検出した。掘形は円形とみられ、東西0.6ｍ以上、南北約1.6ｍ、深さ1.5ｍ以上。西側は調査区外となる。掘形は黄褐色粘土層（地山）を垂直に掘り下げており、地表面から約2.5ｍまで掘り下げたが底部には達しなかった。埋土は褐色砂泥を主体とする。土師器や木製円形容器の部材が出土している。

溝10　調査区北部で検出した。主軸の方位は、北に対し約26.9度西に振る。南北1.9ｍ以上、幅約0.5ｍ、深さ約0.2ｍ。南半部を土坑34に削平されている。埋土は褐色砂礫を主体とする。

柱列13（図12）　調査区北部で検出した４基の柱穴（柱穴13～16）からなる。柱穴は径0.25～0.3ｍ、深さ約0.1ｍ。柱間は北から0.2ｍ・0.7ｍ・0.3ｍ。柱筋の方位は、北に対し西へ約26.9度振る。柱穴13・14および柱穴15・16が、それぞれ２基一対となる配置をとる。

土坑34　調査区北部で検出した。東西6.5ｍ以上、南北2.1～5.1ｍ、深さ約0.8ｍ。東側と西側は調査区外となる。北側の黄褐色粘土層（地山）を掘り下げている。南側と底部は粘土層の広がりに規制されていることから、粘土採掘坑とみられる。埋土は黒褐色細砂を主体とする。

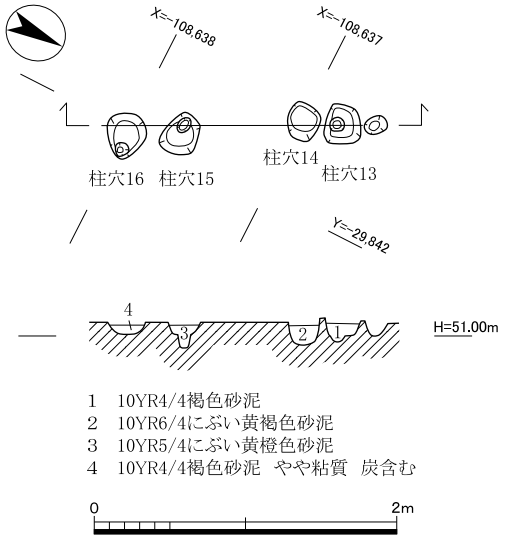


図12　柱列13実測図（１：50）

杭列42（図版５）　調査区南部で検出した。流路27の南東に位置する。直径５～10㎝の杭を30～50㎝の間隔で打ち込む。北側は調査区外となる。流路27の埋め立ての際の土留めとみられる。同様の杭列は流路27内に３箇所確認した。

中世整地層（造成土）　おもに鎌倉時代初期以前の流路27を埋め立てた造成土である。14世紀前半から15世紀後半の土師器を多量に含む。土師器・瓦器が出土した。

４．遺　　物

（１）遺物の概要（表４）

遺物は、整理コンテナに14箱出土した。出土遺物は、平安時代から鎌倉時代初期、鎌倉時代、室町時代のものがある。なかでも室町時代のものが大半を占める。

土器・陶磁器類には、土師器・須恵器・緑釉陶器・瓦器・焼締陶器・施釉陶器・輸入陶磁器などがある。

平安時代末から鎌倉時代初期の土器・陶磁器類には、流路から出土した土師器・須恵器・緑釉陶器・瓦器・陶器・輸入陶磁器がある。

鎌倉時代の土器・陶磁器類には、柱穴・落込みから出土した土師器・輸入陶磁器などがある。

室町時代以降の土器・陶磁器類には、井戸・溝・土坑・柱穴・中世整地層（造成土）などから出土した土師器・瓦器・焼締陶器・施釉陶器などがある。

瓦類には、溝・土坑・流路・中世整地層（造成土）から出土した軒丸瓦・丸瓦・平瓦・塼などがある。塼はその特徴から平安時代前期に遡る可能性がある。

その他の遺物には、室町時代の井戸から出土した木製品や、中世整地層（造成土）から出土した鉄釘などの金属製品がある。

遺物は種類ごとに分け、時代の古い順から記述する。なお、出土土器の時期は、平尾編年[1)]に準拠した。

（２）土器類（図版６、図13、表５）

流路27出土土器（１～５）　１～４は土師器である。１～３は皿N。底部は平坦で、口縁部に２段のナデを施す。小型皿と中型皿に分類できる。色調は赤色系である。１・２は小型皿。口径9.0㎝・9.9㎝、器高1.9㎝・1.5㎝である。３は中型皿。口径11.9㎝、器高2.3㎝である。ともに５B～６

表４　遺物概要表

時　代	内　　容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
平安時代～鎌倉時代初期	土師器、須恵器、緑釉陶器、瓦器、陶器、輸入陶磁器、瓦類		土師器４点、陶器１点、軒丸瓦２点、塼１点		
鎌倉時代	土師器、輸入陶磁器、瓦類		土師器３点		
室町時代	土師器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、瓦類、金属製品、木製品		土師器21点、瓦器１点		
合　計		16箱	33点（２箱）	０箱	14箱

※　コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より２箱多くなっている。

Ａ段階に属する。４は高杯の脚部である。脚部は心棒作りでタテ方向のヘラケズリを施す。色調は赤色系を呈する。５は古瀬戸の小杯である。平坦な底部から体部は内湾気味に上方に伸びる。端部は丸く収める。底部は平坦にヘラケズリを施す。体部はロクロナデを施す。内面に自然釉が掛かる。

柱穴７出土土器（６～８）　６～８は土師器である。６・７は皿Ｓである。底部は平坦で、内外面はナデ調整、口縁部外面は１段凹みナデを施す。色調は白色系である。口径7.6㎝・7.8㎝、器高2.3㎝。７Ａ段階に属する。８は皿Ｎである。底部は平坦で、口縁部に１段のナデを施す。色調は赤色系である。口径12.4㎝、器高2.7㎝。６Ｂ段階に属する。

井戸２出土土器（９）　９は土師器皿Ｓである。底部は平坦とみられ、内外面はナデ調整、体部はやや直線的で、口縁部が開く。色調は白色系である。口径13.7㎝、器高3.4㎝。８段階に属する。

中世整地層（造成土）出土土器（10～30）　10～29は土師器、30は瓦器である。

10は皿Ｓである。底部はやや丸みを帯び、体部は外反気味で口縁部が開く。底部から体部外面下半はオサエ、外面上半から内面はナデ調整。色調は白色系である。口径12.2㎝、器高2.8㎝。６段階に属する。11～16は皿S。小型皿と中型皿に分類できる。いずれも底部から体部外面下半はオサエ、外面上半から内面はナデ調整を施す。11～13は小型皿。体部が外反気味で口縁部が開く。11・12はやや平坦な底部をもち、13は底部中央がやや押し上げられる。色調は11・12が赤色系、13が白色系である。口径7.5～8.5㎝、器高1.6～2.2㎝。14～16は中型皿。底部はやや丸みを帯び、体部は外反気味で口縁部が開く。色調は白色系である。口径10.6～11.9㎝、器高2.7～3.1㎝。11～16は７段階に属する。17は皿Ｎである。やや平坦な底部をもち、体部は外反気味で口縁部が開く。色調は白色系である。口径10.3㎝、器高2.1㎝。立ち上がり部の屈曲がゆるく白色味が強いなど、京内で出土する皿Ｓと異なる様相を呈する。７Ｃ段階に属する。18は皿Ｓである。底部はやや丸みを帯び、体部は外反気味で口縁部が開く。底部から体部外面下半はオサエ、外面上半から内面はナデ調整。色

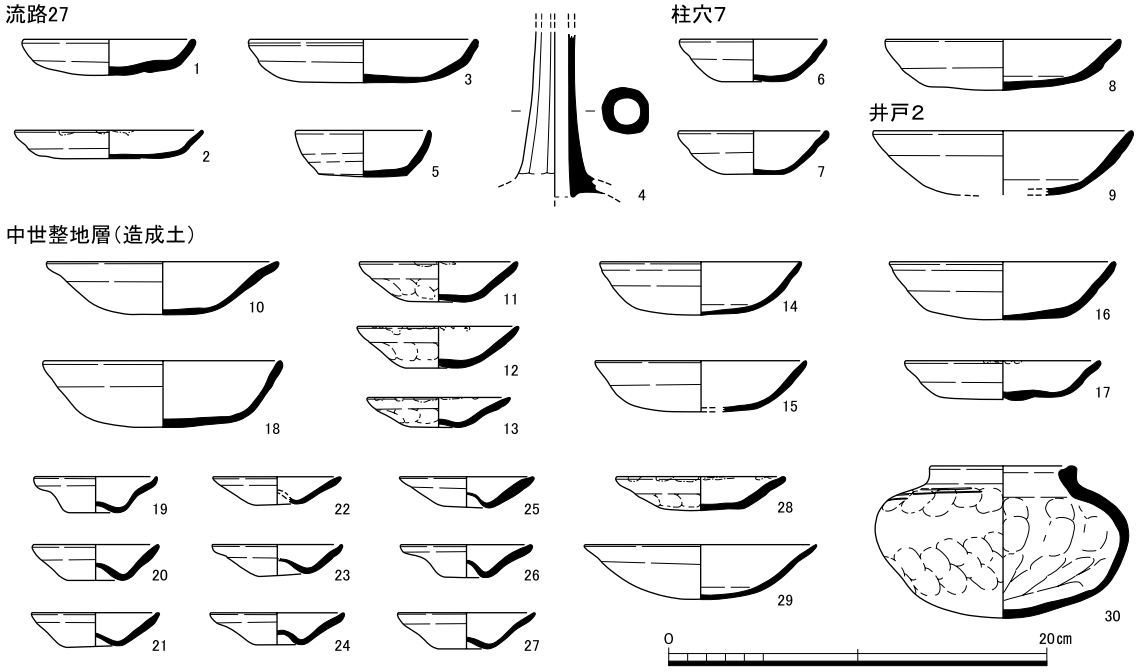


図13　出土土器類実測図（１：４）

調は白色系である。口径12.5㎝、器高3.6㎝。８段階に属する。19～27は皿Sh。いわゆるヘソ皿である。色調は19～25は赤色系、26・27は白色系である。口径6.4～7.2㎝、器高1.5～2.0㎝。19～27は９C段階に属する。28・29は皿Sである。小型皿と中型皿に分類できる。いずれも底部から体部外面下半はオサエ、外面上半から内面はナデ調整を施す。28は小型皿。やや平坦な底部をもち、体部は外反気味で口縁部が開く。色調は赤色系である。口径8.9㎝、器高1.8㎝。器高が低く、オサエの痕跡の様子や赤色味が強いなど、京内で出土する皿Sとは異なる様相を呈する。29は中型皿。底部がやや丸みを帯び、体部は外反気味で口縁部が開く。色調は白色系である。口径12.3㎝、器高2.9㎝。28・29は９段階に属する。

30は瓦器壷である。丸みを帯びた底部とやや扁平な体部からなる。口縁部は短く立ち上がり、端部は内傾する。表面の剥落が著しく、形成技法や調整手法の観察に困難があったが、底部から体部外面と内面はオサエ、口縁部付近はナデ調整を施す。肩部には、わずかにミガキが確認できる。

表５　出土土器類一覧表

番号	器種	器形	遺　構	口径(㎝)	器高(㎝)	底径(㎝)	残存率(%)	胎土色調	備　考
1	土師器	皿N	流路27	9.0	1.9		30	10YR7/4	
2	土師器	皿N	流路27	9.9	1.5		35	7.5YR8/4	口縁部に煤付着
3	土師器	皿N	流路27	11.9	2.3		65	7.5YR7/4	
4	土師器	高杯	流路27		(8.7)		脚50	7.5YR8/6	脚部のみ
5	陶器	小杯	流路27	7.0	2.5	4.7	100	2.5Y8/2	古瀬戸
6	土師器	皿S	柱穴7	7.6	2.3		100	10YR8/2	
7	土師器	皿S	柱穴7	7.8	2.3		100	10YR8/2	
8	土師器	皿N	柱穴7	12.4	2.7		75	7.5YR7/4	
9	土師器	皿S	井戸2	13.7	3.4		25	10YR8/2	
10	土師器	皿S	中世整地層(造成土)	12.2	2.8		65	7.5YR8/4	
11	土師器	皿S	中世整地層(造成土)	8.3	2.2		100	10YR8/2	口縁部に煤付着
12	土師器	皿S	中世整地層(造成土)	8.5	2.2		100	10YR8/2	口縁部に煤付着
13	土師器	皿S	中世整地層(造成土)	7.5	1.6		100	10YR8/2	口縁部に煤付着
14	土師器	皿S	中世整地層(造成土)	10.6	2.8		100	10YR8/2	
15	土師器	皿S	中世整地層(造成土)	11.1	2.7		35	10YR8/2	
16	土師器	皿S	中世整地層(造成土)	11.9	3.1		100	10YR8/2	
17	土師器	皿N	中世整地層(造成土)	10.3	2.1		100	10YR8/3	口縁部に煤付着
18	土師器	皿S	中世整地層(造成土)	12.5	3.6		100	10YR8/2	
19	土師器	皿Sh	中世整地層(造成土)	6.4	1.9		100	7.5YR8/3	
20	土師器	皿Sh	中世整地層(造成土)	6.6	1.9		65	10YR8/2	
21	土師器	皿Sh	中世整地層(造成土)	6.7	1.9		100	10YR8/2	
22	土師器	皿Sh	中世整地層(造成土)	6.7	1.5		95	10YR8/2	
23	土師器	皿Sh	中世整地層(造成土)	6.9	1.6		98	10YR8/2	
24	土師器	皿Sh	中世整地層(造成土)	7.1	1.7		100	10YR8/2	
25	土師器	皿Sh	中世整地層(造成土)	7.1	1.7		100	10YR8/2	
26	土師器	皿Sh	中世整地層(造成土)	6.9	1.8		100	10YR8/2	
27	土師器	皿Sh	中世整地層(造成土)	7.2	2.0		80	10YR8/2	
28	土師器	皿S	中世整地層(造成土)	8.9	1.8		100	7.5YR8/4	口縁部に煤付着
29	土師器	皿S	中世整地層(造成土)	12.3	2.9		100	10YR8/3	
30	瓦器	壷	中世整地層(造成土)	7.5	8.1		100	N6/0	

（３）瓦類（図版６、図14）

巴文軒丸瓦（瓦１・２）　瓦１は右巻き３巴文、瓦２は左巻き３巴文を配する。頭部は離れ、尾部は互いに接し界線となる。外区は太い圏線。笵はＢ型[2)]。瓦当部裏面上端に溝を付け、丸瓦を挿入し、粘土を付加して接合する。瓦当部側面上半・裏面にナデを施す。粘土は精良で、灰色、硬質。瓦１は中世整地層（造成土）、瓦２は流路27から出土した。平安時代後期、京都産。瓦１は平等院で同文瓦が出土している[3)]。

塼（瓦３）　型枠作り。表面はヘラケズリで仕上げる。一辺19.2cm以上、厚さ5.5cm以上ある。表面は赤色や黒色に変色しており、二次的に被熱したとみられる。平安時代の可能性がある。流路27から出土した。

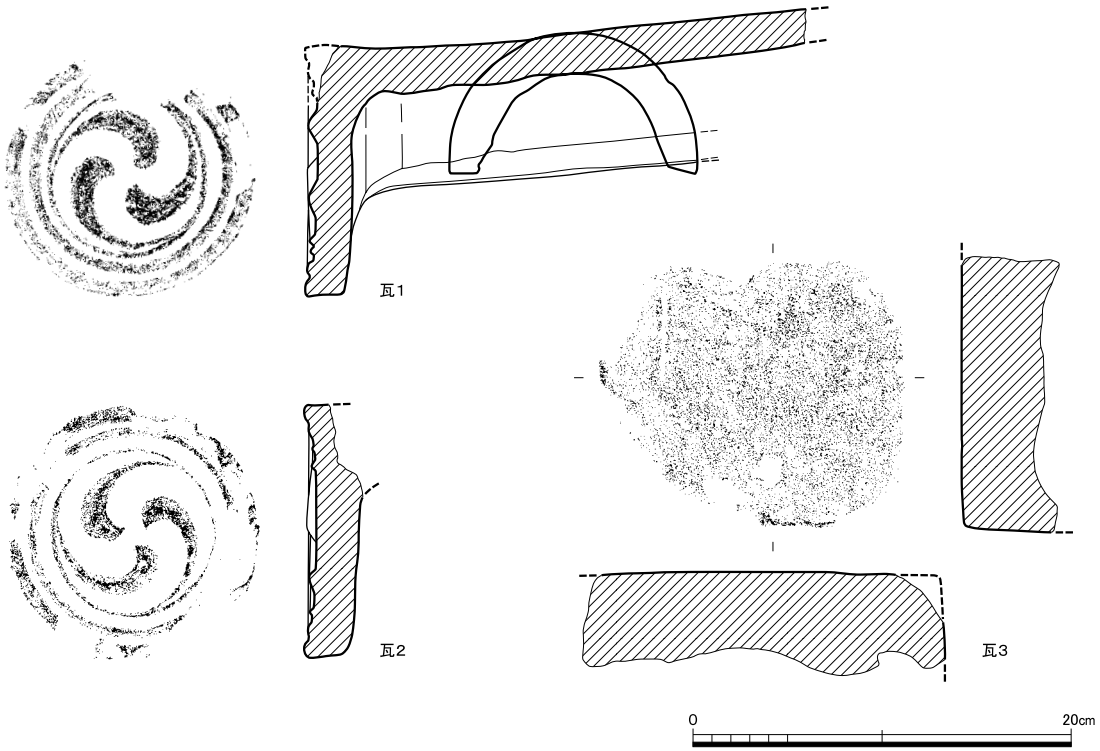


図14　出土瓦類拓影及び実測図（１：４）

註

１）　平尾政幸「土師器再考」『洛史　研究紀要　第12号』 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2019年

750年			840年			930年			1020年			1110年		1170年			1260年			1350年		1410年			1500年			1590年			1680年		1740年		1800年		1860年
1			2			3			4			5		6			7			8		9			10			11			12		13		14	
A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	A	B	C	A	B	C	A	B	A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	A	B	A	B

土師器胎土の分類（赤色系・白色系）については、平尾政幸氏にご教示いただいた。

２）　『木村捷三郎収集瓦図録』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1996年

３）　『史跡及び名勝　平等院庭園保存整備報告書』 宗教法人平等院　2003年

5．まとめ

今回の調査では、鎌倉時代初期以前、鎌倉時代、室町時代の遺構・遺物を確認した。古代から近世における嵯峨の土地利用状況は、残された絵図類等史料の分析によって比較的詳しく復元されているものの、調査地が所在する嵯峨北部については、鎌倉時代から室町時代前期の絵図類では記述が少ない地域であることから、詳細な復元案は示されていない[1)]。今回の調査成果は、当該期における嵯峨北部の土地利用を考えるにあたり、重要な成果であったと考える。以下、各時期の遺構について概略する。

鎌倉時代初期以前

調査区中央部で北東から南西方向の流路27を検出した。流路は完掘していないため存続時期は不明であるが、上面に平安時代末から鎌倉時代初期の土器を含む泥土が堆積していた。泥土が堆積した当時は流水がほとんどみられず、周辺から0.9～1.3ｍ低い窪地の状態で湿地化していたと考えられる[2)]。なお、少数ではあるが平安時代の瓦や塼が流路から出土した。周辺に瓦葺きの建物が存在した可能性がある。

鎌倉時代

調査区北部で柱列23を検出した。柱列23は柱穴の直径が0.5～0.6ｍ、柱間約2.7ｍ（９尺）あり、柱列の方位は東に対し約26.5度北に振る[3)]。柱列23が建物の一部となるかを確認するために調査区の北側に拡張区を設けたが、柱穴７の北側2.7ｍの地点（拡張区１）では対応する場所では柱穴を検出できなかった。柱穴７からは埋納されたとみられる複数の土師器皿が出土した。なお、この段階でも流路の凹みはまだ埋没しておらず、排水不良の窪地であったと考えられる。

室町時代

調査区北部で柱列13・溝10・土坑34、調査区南部で井戸２などを検出した。また、調査地を平坦に造成する際に施された中世整地層（造成土）と、それの土留めと想定する杭列群を確認した。

各遺構の成立時期は、土坑34が土地造成前、井戸２が土地造成後である。それらに対して、調査区北部で検出した柱列13と溝10は、今回の調査では時期を検討できる材料を得られなかったため、成立時期は不明である。しかし、柱列13と溝10が造成面では検出できなかったこと、主軸方位が鎌倉時代の柱列23の方位とほぼ直交することなどから、これら遺構の時期は土地造成前の可能性も考えられる。

柱列13と溝10の時期を土地造成前と考えてよいのであれば、調査地の範囲内では、土地造成後は建物を含めた遺構そのものが希薄化する傾向にある[4)]。なお中世整地層（造成土）からは、14世紀前半から15世紀後半の土器が出土した[5)]。出土遺物に時期幅が認められるため、土地造成の時期については、それらの出土状況に基づいた詳細な検討が今後必要と考える。

註

1） 山田邦和「中世都市嵯峨の変遷」『平安京 ―京都 都市図と都市構造』 京都大学学術出版会　2007年

2） 村尾政人氏の山城国葛野郡条里復元案によると、調査地は「社里」の南西部、条里呼称法にもとづく土地表記としては一条二里十四坪に相当する。10世紀初頭頃の景観を伝えるとされる『山城国葛野郡班田図』では、当該地の地目は野原と田圃と表記されている。

村尾政人「まとめ」『嵯峨遺跡 埋蔵文化財発掘調査報告書』 国際文化財株式会社　2019年

上田正昭・林屋辰三郎「律令制の成立」『京都の歴史１ 平安の新京』 京都市史編さん所　1970年

3） 今回検出した柱列23の主軸方位は、『山城国葛野郡班田図』から復元した、北に対して約16度西に振る条里の傾きよりも、さらに約10度西側に傾く。なお、当該期の嵯峨の土地利用を分析した山田邦和氏は、室町時代前期の嵯峨北部では厳密な都市計画に基づく開発は希薄であり、便宜に応じて道路を伸ばして寺院や民家を配置したと想定している（山田前掲、171頁）。

4） 15世紀前半頃の天龍寺周辺の様子を描いた『山城国嵯峨諸寺応永鈞命絵図』（図15）に記された道路と現況図を比較検討すると、調査地は天龍寺の塔頭である「恵林寺」近傍にあることがわかる（山田前掲）。今回検出した遺構も、これに関連する可能性がある。

『山城国嵯峨諸寺応永鈞命絵図』天龍寺所蔵『日本荘園絵図聚影　二　近畿一』 東京大学出版会　1992年　宗教法人天龍寺から複写図掲載を許可していただいた。

5） 土師器の年代観は平尾政幸氏よりご教示いただいた。なお中世整地層（造成土）から出土した土師器皿は、先述のように赤く発色する素地を使用しており、かつ京内の皿Ｓ・皿Ｎとは器形や調整が異なるものが出土している。一方、土師器高杯についても、京内の白色土器高杯と形態は同様であるが、赤く発色する素地を使用する。このように、嵯峨周辺から出土する土師器は京内出土土師器とは異なる特徴を有しており、乙訓地域など他地域との関連性を考慮する必要がある。

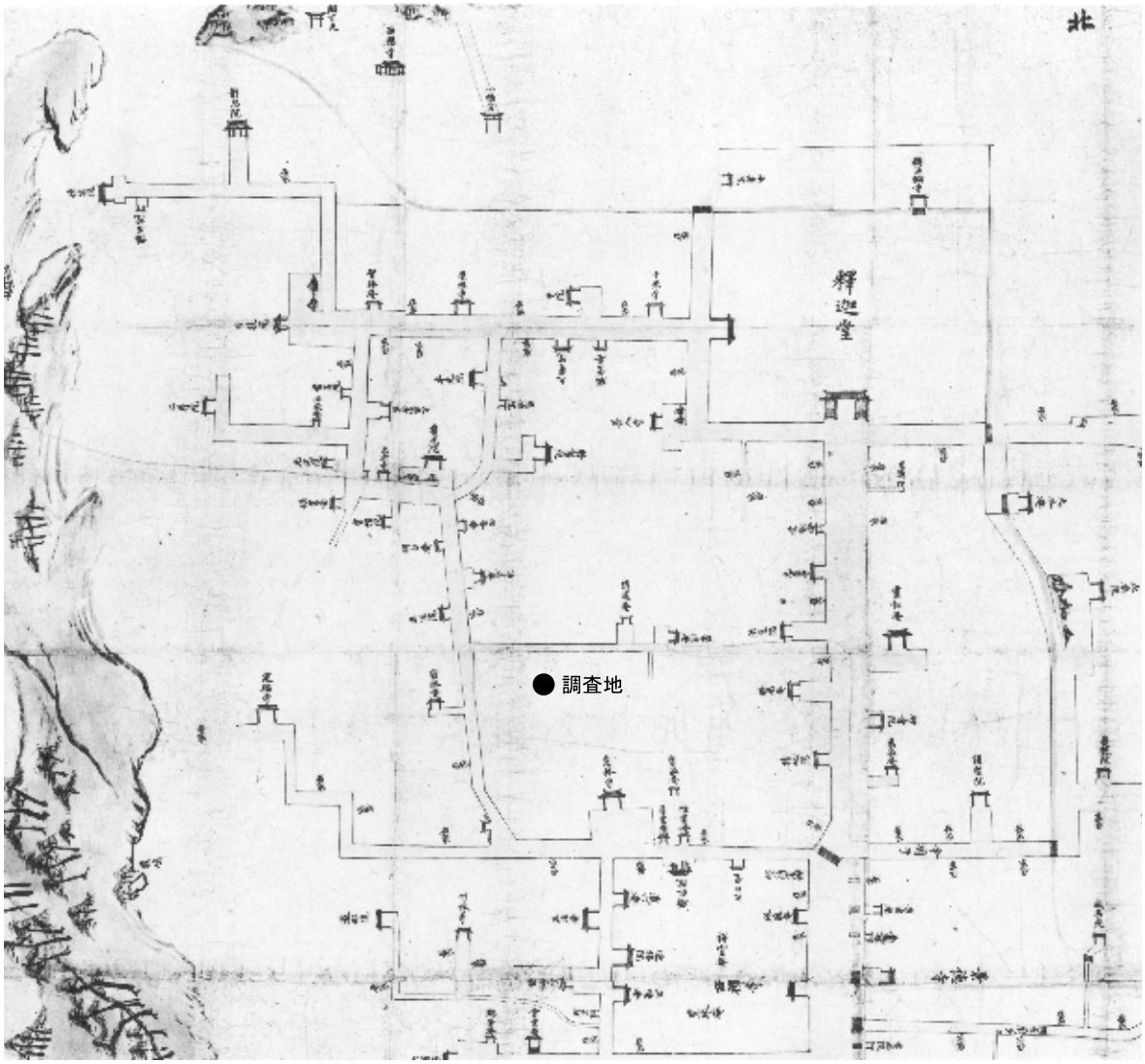
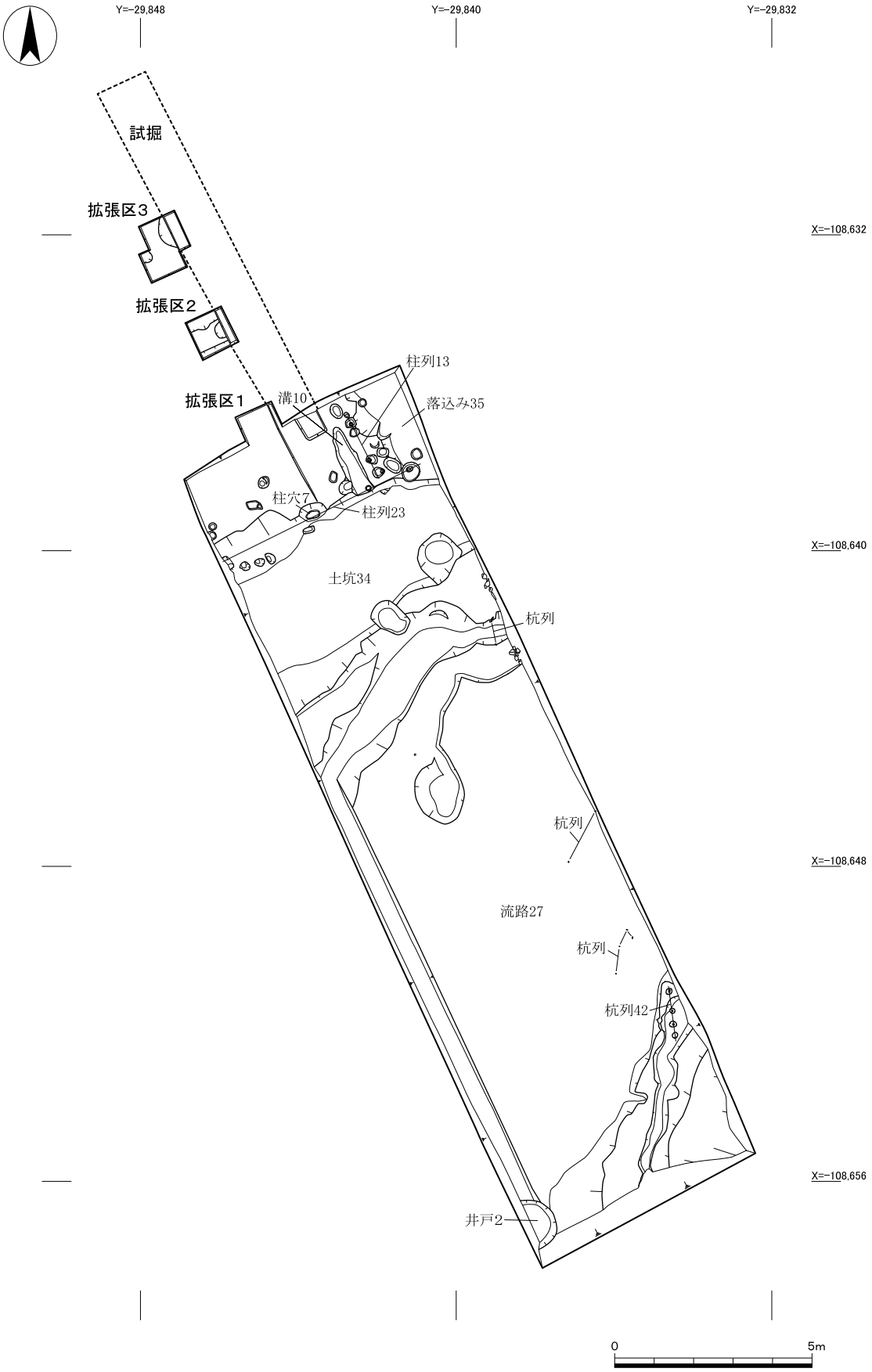


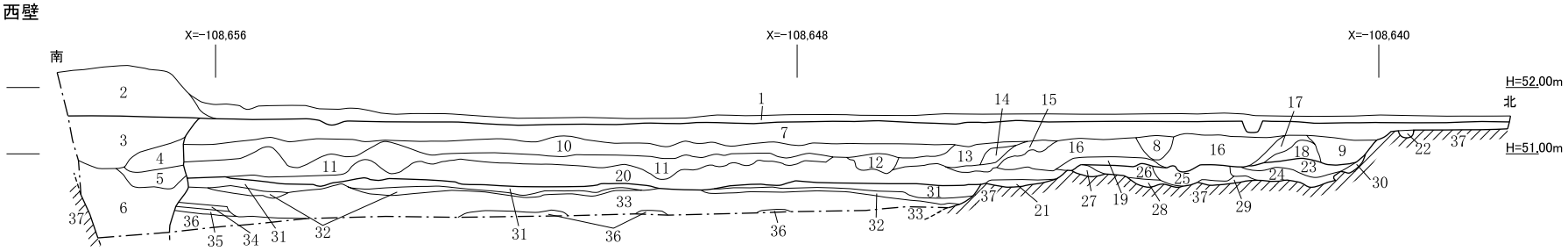
図15 『山城国嵯峨諸寺応永鈞命絵図』天龍寺所蔵
『日本荘園絵図聚影　二　近畿一』 東京大学出版会　1992年　より複写加筆

図　　版


Y=-29,848
Y=-29,840
Y=-29,832
試掘
拡張区3
拡張区2
拡張区1
X=-108,632
X=-108,640
X=-108,648
X=-108,656
柱列13
溝10
落込み35
柱穴7
柱列23
土坑34
杭列
杭列
流路27
杭列
杭列42
井戸2
0
5m

遺構平面図（1：150）

調査区西壁断面図（1：100）



1 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥
2 10YR3/3暗褐色砂泥
耕作土

3 10YR3/4暗褐色砂泥 粘質 土師器少量含む
4 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 やや粘質 土師器・炭含む
5 10YR4/2灰黄褐色砂泥 粘質 土師器・炭含む
6 10YR4/4褐色砂泥 粘土多量混じる 土師器・炭少量含む
井戸2

7 10YR3/4暗褐色砂泥 やや粘質 土師器・炭含む
8 10YR4/4褐色砂泥 やや粘質 土師器・炭少量含む
9 10YR4/4褐色砂泥 やや粘質 土師器・炭少量含む
10 10YR4/4褐色砂泥 粘質 土師器・炭含む
11 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥 粘質 土師器・炭含む
12 10YR4/3にぶい黄褐色粘土 φ2～6㎝の礫多量混じる
13 2.5Y5/3黄褐色砂泥 やや粘質 土師器・炭少量含む
14 2.5Y4/4オリーブ褐色砂泥 礫混じる
15 2.5Y5/4黄褐色砂泥 やや粘質
16 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 やや粘質
17 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 やや粘質 土師器・炭少量含む
18 10YR5/3にぶい黄褐色砂泥 やや粘質 土師器・炭少量含む
19 2.5Y4/4オリーブ褐色シルト
中世整地層（造成土）

20 2.5Y4/4オリーブ褐色粘土・礫混じる
21 2.5Y5/4黄褐色砂礫
中世整地層（造成土）

22 10YR4/3にぶい黄褐色粘土（柱穴）

23 2.5Y5/4黄褐色砂泥 粘質
24 10YR4/4褐色砂泥 粘質 φ1～4㎝の礫多量混じる
25 2.5Y5/3黄褐色シルト 粗砂混じる 底部に土師器含む
26 2.5Y6/3にぶい黄色シルト
27 2.5Y6/4にぶい黄色シルト φ2～7㎝の礫多量混じる
28 2.5Y5/3黄褐色砂礫
29 5Y4/2灰オリーブ色粗砂
土坑34

30 2.5Y4/4オリーブ褐色砂泥 粘質 黄色粘土ブロック混じる （柱穴28）

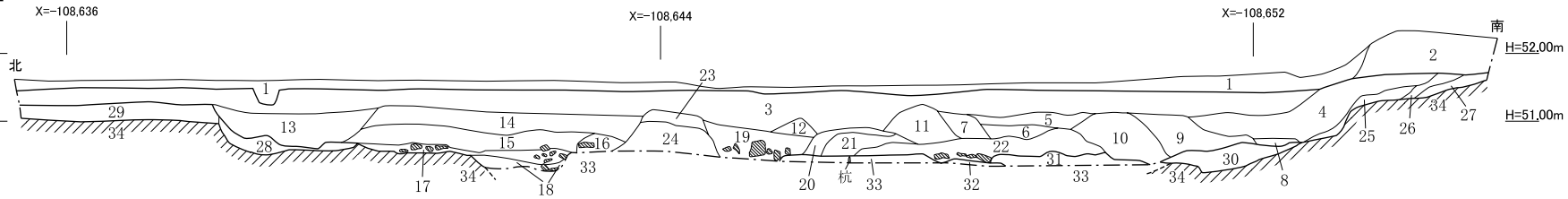
31 2.5Y5/2暗灰黄色粘土 φ1㎝の礫少量含む
32 10YR4/1褐灰色粘土
33 7.5Y4/1灰色砂礫
34 10YR4/2灰黄褐色粘土
35 2.5Y4/2暗灰黄色砂礫 φ1～5㎝の礫多量混じる
36 2.5Y6/2灰黄色粘土 粗砂混じる
流路27

37 10YR5/6黄褐色粘土 （地山）

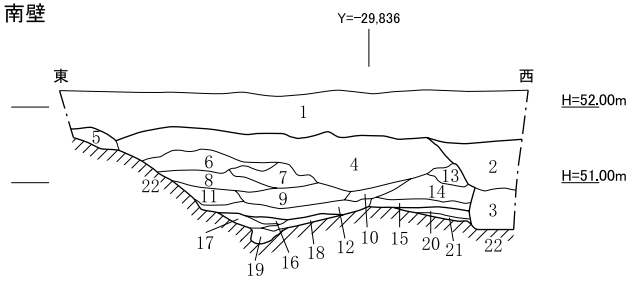
0 4m

調査区東壁・南壁断面図（1：100）

東壁



南壁



南壁

1 10YR3/4暗褐色砂泥 粘質 土師器・炭含む（耕作土）
2 10YR3/4暗褐色砂泥 粘質 土師器少量含む
3 10YR4/4褐色砂泥 粘土多量混じる 土師器・炭少量含む
4 10YR3/4暗褐色砂泥 粘質 土師器・炭多量含む
5 7.5YR4/4褐色砂泥 粘質 礫含む
6 10YR3/4暗褐色砂泥 粘質 土師器少量含む
7 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 粘質 土師器・炭微量含む
8 7.5YR3/3暗褐色砂泥 粘質 土師器・炭少量含む
9 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥 粘土混じる 土師器・炭少量含む
10 2.5Y5/4黄褐色砂泥 粘質 土師器・炭少量含む
11 10YR4/4褐色砂泥 粘質 瓦・土師器・炭含む
12 10YR4/4褐色砂泥 粘質 φ4～12cmの礫混じる
13 10YR4/4褐色砂泥 粘質 灰色粘土ブロック混じる
土師器・炭少量含む礫混じる
14 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥 粘土多量混じる 炭少量含む
15 2.5Y5/3黄褐色砂泥 やや粘質 粗砂混じる
16 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥 粘質強 土師器少量含む
17 10YR4/4褐色粘土 粘質 φ1～4cmの礫混じる
18 2.5Y5/4黄褐色粘土
19 2.5Y5/4黄褐色粘土 φ1～5cm礫混じる
20 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥 やや粘質 粗砂混じる
φ3cmの礫微量含む
21 2.5Y5/4黄褐色粘土 粗砂混じる
22 10YR5/6黄褐色粘土（地山）

井戸2

中世整地層（造成土）

流路27

東壁

1 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥
2 10YR3/4暗褐色砂泥 粘質 土師器・炭含む
3 10YR3/4暗褐色砂泥 土師器・炭少量含む
4 10YR3/4暗褐色砂泥 粘質 土師器・炭多量含む
5 10YR4/4褐色砂泥 土師器・炭少量含む
6 10YR4/4褐色砂泥 粘質 土師器・炭少量含む
7 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥 土師器・炭含む
8 2.5Y5/4黄褐色砂泥 粘質 土師器・炭少量含む
9 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥 土師器・炭含む
10 10YR4/4褐色砂泥 やや粘質 瓦・土師器含む
11 2.5Y5/4黄褐色砂泥 底部に土師器溜り
12 2.5Y4/4オリーブ褐色砂泥
13 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 やや粘質 土師器・炭多量含む
14 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥 やや粘質 土師器・炭含む
15 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥 土師器・炭少量含む
16 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥 φ20cmの礫混じる
17 10YR4/3にぶい黄褐色シルト 粘質 φ10～20cmの礫混じる
18 10YR4/1褐色粘土 粗砂混じる 木片含む
19 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥 φ10～30cmの礫混じる
20 10YR4/6褐色シルト やや粘質
21 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥 シルト混じる 土師器・炭少量含む
22 2.5Y5/4黄褐色シルト
23 2.5Y5/4黄褐色砂泥 土師器・炭少量含む
24 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥 粘質 土師器少量含む
25 10YR3/4暗褐色砂泥 粘質 土師器・炭少量含む
26 10YR4/6褐色砂泥
27 10YR5/6黄褐色砂泥
28 10YR4/3にぶい黄褐色シルト 粘質（土坑34）
29 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥 やや粘質（落込み35）
30 10YR3/4暗褐色砂礫 φ10～20cmの礫混じる
31 10YR4/4褐色砂礫
32 2.5Y5/2暗灰黄色粘土
33 7.5Y4/1灰色砂礫
34 10YR5/6黄褐色粘土（地山）

耕作土

中世整地層（造成土）

流路27

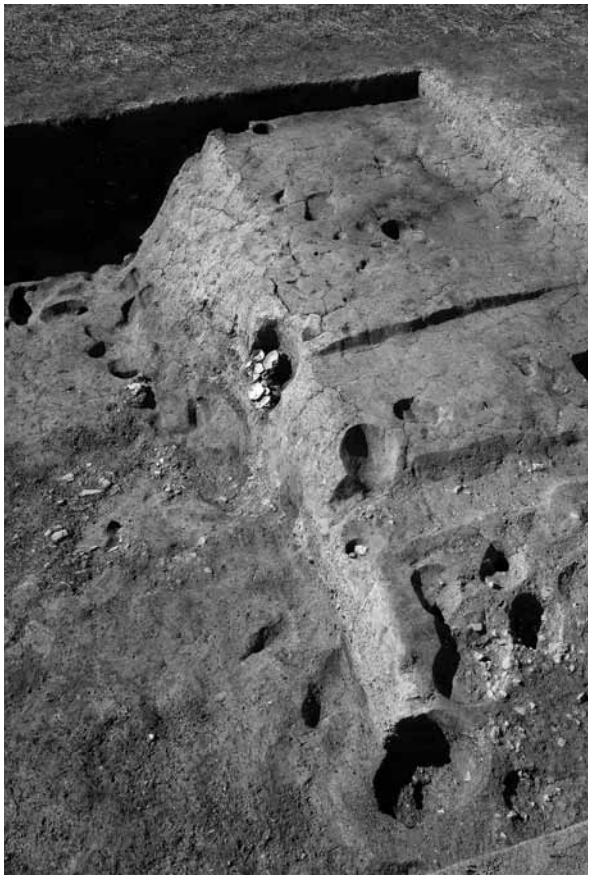
0 4m

図版3 遺構

図版４　遺構

１　調査区全景（北西から）

２　調査区南東部（西から）



1　柱列23（東から）

2　柱列23柱穴７土器出土状況（東から）

3　杭列42（南から）

4　流路27瓦出土状況（北から）

5　拡張区２全景（北西から）

3

6

5

7

11

16

12

17

13

28

30

瓦1

瓦2

出土土器類・瓦類

報　告　書　抄　録

ふりがな	さがいせき
書名	嵯峨遺跡
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告
シリーズ番号	２０２２－１０
編著者名	小檜山一良
編集機関	公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
発行所	公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所
発行年月日	西暦2023年４月28日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
嵯峨遺跡（さがいせき）	京都市右京区（きょうとしうきょうく） 嵯峨釈迦堂（さがしゃかどう） 門前裏柳町（もんぜんうらやなぎちょう） 26-2番地他	26100	937	35度 01分 13秒	135度 40分 23秒	2022年10月17日～2022年11月７日	約135㎡	住宅建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
嵯峨遺跡	寺院跡	平安時代後期～鎌倉時代初期	流路	土師器、須恵器、緑釉陶器、瓦器、陶器、輸入陶磁器、瓦類	平安時代後期から鎌倉時代初期の流路を検出した。 鎌倉時代と室町時代の柱列を確認した。
		鎌倉時代	柱列、落込み	土師器、輸入陶磁器、瓦類	
		室町時代	井戸、溝、柱列、土坑、杭列	土師器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、瓦類	

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2022-10

嵯　峨　遺　跡

発行日　2023年4月28日

編　集
発　行　公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

住　所　京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435　℡ 075-415-0521
http://www.kyoto-arc.or.jp/

印　刷　三星商事印刷株式会社

住　所　京都市上京区七本松通下長者町下る三番町273番
〒602-8358　℡ 075-467-5151